

附 熊本県五木村頭地の石錘と石皿

島津義昭

はじめに

頭地下手遺跡については故小林久雄先生の詳細な報告があり、中九州の著名な遺跡の一つである。^① 今夏、五木村をおとずれ、下手遺跡を運動場としている東小学校保管の遺物と、附近の久領在住、荒木深氏所蔵遺物を実見する機会をえたので、二、三の注意すべき遺物を紹介したい。^②

1

石錘（図1）—総数37点、全部完成品である。大部分が扁平な自然礫の両端を雑に打ち欠いたものである。ほとんどが、わずかな凸凹をつけるに留め注意しなければ自然礫と違える如きものであるが、一点だけ原礫の長軸を中心として打撃が左右からなされているものがみられた（1）。原材は遺跡の西下を流れる川辺川の岸で豊富に採集できるものである。重量は最大218g、最少36g（2）を計り、総じて四辺形に近い礫使用のものが重い傾向にある。平均重量は133.7gである。このような値は西日本の河川ぞいの縄文式遺跡にみられる網漁錘（石錘）の3倍近くもあり、したがって下手遺跡のものを全部漁網錘とみる事は出来がたい。^③ いわゆる石錘については民族誌的にも多様に使用されている事は既に注意されている^④が、縄文時代の大型石錘についての具体的機能については今後の課題としよう。なお小林報告にある有溝石錘は今回みられなかった。

2

石皿

1、荒木深氏採集、所蔵品。久領出土、完形品である。四辺形の自然礫を使用したもので、皿状の使用面はよく研磨されなめらかである。裏面は自然礫のままで全体的にわずかに湾曲を示す。長径37.2cm、短径23.1cm、原礫の厚さ6.0cm、使用面の中心部で3.1cmを計る。

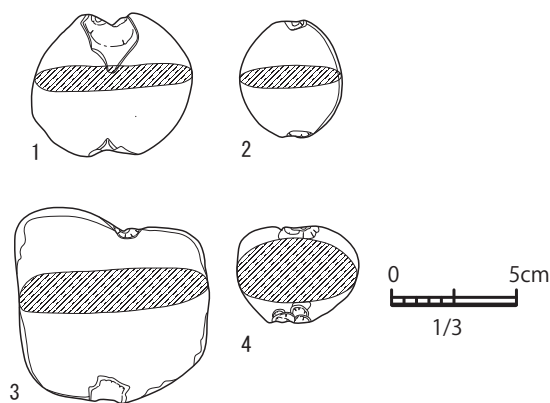
2、東小学校保管、下手遺跡出土。長径30cm以上の扁平礫を利用したもので全体の1/3程の破片である。これも一面のみを使用、裏面には手の加わった跡は認められない。現存長径26cm、短径13cm、厚さは中央部で6.5cmを計る。なお石皿と対に使用されたと考えられる磨石は16点保管されていた。前回、小林先生の発掘では石皿は出土していない。

3

石皿の出土した久領は下手遺跡の北西、川辺川をはさんだ対岸（直線距離約400m）にあたり、下手と立地が似る。荒川氏の所蔵品には同じく久領採集の磨製石斧3点があり、現在迄伴出土器が不明であるが、久領地区にも縄文期遺跡の存在する可能性が大であろう。^⑤

（註）

- ① 小林久雄（1967）、肥後国球磨郡五木村頭地下手遺跡、九州縄文土器の研究、140—164、熊本
- ② この踏査は下條信行氏と共に行ったものであり、遺物の計測・実測等、同氏に負う事が大である。なお東小学校保管の遺物は小林先生の発掘後の資料であり、従って未発表のものである。
- ③ 渡辺誠（1968）、西日本における縄文時代の網漁法について、物質文化12、14—19、東京。西日本の切目石錘42例、有溝石錘3例につき、平均値を求めたところ41.4gという値が出ている。
- ④ 渡辺仁（1952）、所謂石錘について。先史学に於ける用途の問題、考古学雑誌、第55巻第2号、34—42、東京。
- ⑤ 東小学校保管の遺物には、久領出土の注記のある弥生式土器（中期）の壺の胴下半部があり、出土地点を实見しえなかったが、この地区に弥生時代の遺跡の存する可能性もある。



※ 底本は、木村幾多郎さんに提供していただいた。1971.11.21 発行、九州始原文化研究会会報1、p7、福岡。